

【事例紹介②】

入学選抜方法の妥当性の検証：2020年度卒業生を中心に（要旨）

入試委員会・IR専門職

本学では、入試選抜方法の妥当性を検証するため、2021年3月末時点における本学学生の個票データ（2017年度入学生分）を用い、入試選抜方式の違いが学力と卒業にどう影響を与えているかを統計的な手法を用いて検証しています。具体的には、一般AO入試による入学生を基準として、その他の入試選抜方法による入学者との間に学力差が見られるか、4年生終了時の卒業確率に差があるかを検証しました。分析に使用した主要な変数は、該当学生の入試選抜方式（20区分の質的変数）、卒業時点の学力の代理変数であるGPA（数量変数）、卒業や在退学など該当学生の在籍状態（5区分の質的変数）です。またそれ以外に、留年経験の有無（2区分の質的変数）、出身高校偏差値（数量変数）や所属学科（4区分の質的変数）など該当学生の諸属性を推定におけるコントロール変数として使用しています。

分析方式は次の通り：①**学力と入試選抜方式の関係**を見るためにGPAを被説明変数、入試選抜方式を説明変数とする回帰分析を行いました。なお、所属学科など諸属性をコントロール変数として説明変数に加えています。また推定方法は、平均GPAが0未満と4超が存在しない変数であり、打ち切り回帰となるため、トービットモデルを採用しました。②**卒業と入試選抜方式の関係**を見るために、その学生が卒業・在学・退学など、いずれのカテゴリーに所属するかを示す**在籍状態**を被説明変数、入試選抜方式を説明変数とする回帰分析を行いました。①と同じく、諸属性をコントロール変数として説明変数に加えています。なお、被説明変数である在学状況は二つ以上の選択肢を持ち、「卒業→在学→退学」という順序で状態が悪化していると見ることができる**序数的な質的変数**であると考え、推定方法として**順序プロビットモデル**を採用しています。

①②の二つの推定結果を踏まえ、2021年3月末に卒業した2017年度入学者について、考察を行い、詳細は大学協議会にて報告を行いました。